

◎コシヒカリの穂肥は、

1回目は、生育に応じて 慎重かつ的確に

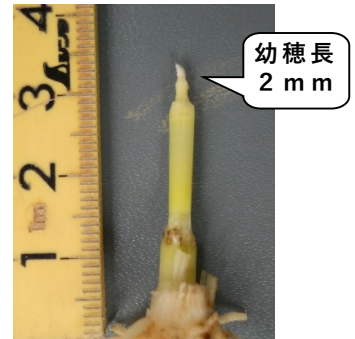
2回目は、穂揃期に適正な葉色(4.2~4.5)となるよう確実に施用しましょう。

コシヒカリの生育状況 (6月18日現在)

- ・現在の生育は近年並みの速さで、茎数はやや多くなっています。今後近年並みの気温で推移すると幼穂形成期は7月11日頃になると見込まれます。
- ・直近のコシヒカリの生育状況については、各地区の「青田まわり」や支所に掲示している「かわら版」等でご確認ください。

<6月18日現在 コシヒカリ生育調査結果と幼穂形成期予想>

	田植日	草丈 (cm)	茎数 (本)		葉令	葉色	幼穂形成期 (幼穂長 2mm)
			株当り	m ² 当り			
R6	5/15	36.1	21.6	444	9.2	4.2	予想: 7/11頃
R5	5/16	37.2	17.1	337	8.7	4.3	7/11
平年値	5/14	38.0	18.5	386	9.2	4.3	7/11



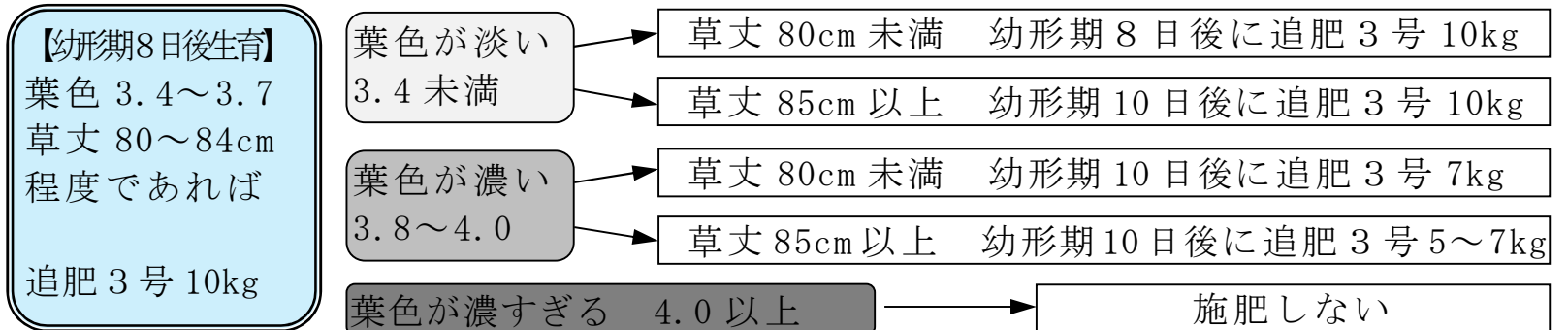
幼穂形成期の幼穂の姿

1 穂肥の施用

◆分施施用の場合

【1回目】幼穂形成期から8日後(幼穂長 15mm の時期)に生育状況を確認し、以下の表を参考に穂肥を施用し、穂揃期の葉色を 4.2~4.5 に誘導しましょう。

10a 当たりの施肥量



【2回目】1回目から1週間後に追肥 3号 10~13kg/10a を確実に施用しましょう。

※1回目を施用していない場合は、葉耳間長 ± 0 cm の時期(出穂の 10 日前)に追肥 3号 10~13kg/10a を施用しましょう。

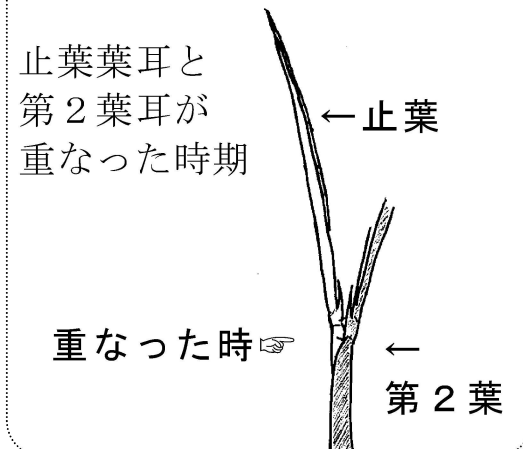
◆肥効調節型基肥 (Jコートコシヒカリ) を施用した場合

- ・葉耳間長 ± 0 cm の時(出穂の 10 日前)に葉色が 4.0(砂壤土 4.2)以下の場合、穂がちらほら見られる時(出穂期 3 日前)までに追肥 3号を 5~7 kg/10a 施用し、穂揃期の葉色を 4.2~4.5(砂壤土では 4.5)に誘導してください。

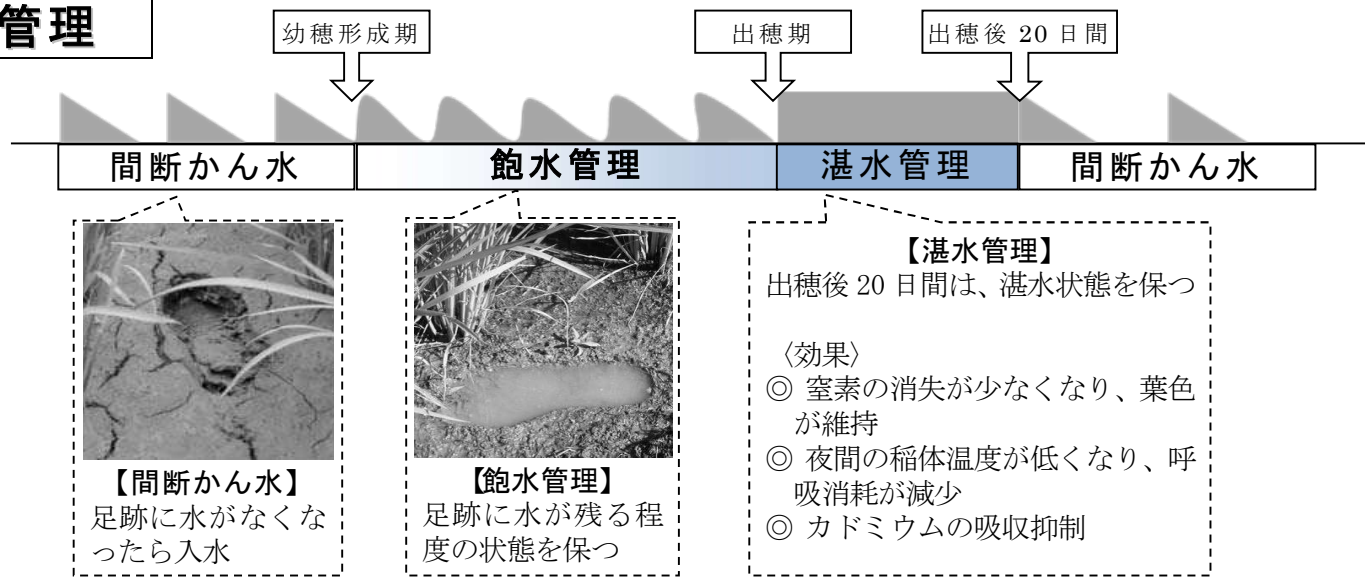
幼穂形成期頃から高温が続き、さらに登熟期にかけて高温が予想される場合は、確実に追加穂肥を施用しましょう。

また、漏水が激しいほ場や噴出した砂が多い圃場では、葉色が低下しやすいため、生育を見ながら部分的な追肥も検討しましょう。

葉耳間長 ± 0cm (出穂 10 日前)



2 今後の水管理



◆ 幼穂形成期以降

土壌中の養分は水分とともに吸収されます。幼穂形成期以降は、土中の窒素を効率的に吸収し、稲体活力を維持できるように土壌が水不足にならないよう、出穂期までは足跡に水が残る程度の飽水管理をしてください。

◆ 出穂期以降

出穂、開花期以降はイネが最も水を必要とする時期ですので、こまめに入水し、出穂から 20 日間は常に水を張った状態を保つ湛水管理をしてください。

登熟期間が高温で推移する中で水不足の圃場が散見され、しばしば白未熟粒や胴割粒の発生を助長しています。

水不足が懸念される場合は、水持ちの悪化や葉色の低下を回避するため、地域内で取水時期を話し合い、水を切らさない管理を心がけてください。

3 雑草対策

◆ 畦畔の雑草

出穂直前や出穂後に草刈りを行うと、カメムシ類を水田内に追い込むことになるので、草刈り運動期間（6月28日（金）～7月7日（日））までに畦畔等の草刈りを徹底し、その後はイネ科雑草の穂が出ないように草刈りし、カメムシ類が発生しにくい環境づくりに努めましょう。

また、出穂期近くに畦畔除草剤を散布すると、着色米が発生しやすくなるので、畦畔除草剤は、出穂1か月前までに終わらしましょう。また、散布時には周辺作物への飛散防止に努めてください。

◆ 本田内の雑草

ノビエやホタルイは、水稻の出穂前からカメムシ類をほ場内に誘引する要因となり、水稻への被害を助長するので除草に努めましょう。

クサネムは、種子が玄米に混入すると異物として検査等級を格下げさせるため、クサネムに効果の高い除草剤を散布するか、種子が形成、落下する前に刈り取るなどして除去しましょう。

農作業安全のポイント

- ◇ 畦畔に傾きや段差が生じ、足がとられやすい場合があります。草刈りや防除作業時にはほ場周辺の状況を事前確認し、十分足元に気を付けましょう。
- ◇ 熱中症対策として、気温の高い時間帯を外し作業を行うとともに、できるだけ複数人で作業し、時間を決めて体調確認を行いましょう。



JA共済の
地域貢献活動